

28Q-pm099

プロマック D 錠のアルロイド G 懸濁液中の安定性

○菅谷 量俊^{1,2}, 村田 和也², 片山 志郎¹(¹日本医大病院薬,²日本医大多摩永山病院薬)

【目的】口内炎の発症原因は、重症疾患、栄養失調、単純疱疹ウイルス感染などのほか、癌化学療法、放射線治療などによっても発症することが知られており、重篤な口内炎を十分かつ短期間に治療できる薬剤が望まれていた。口内炎の治療方法としては、ステロイド外用薬の患部への塗布・貼付が一般的であったが、我々の施設においては、1995年頃より、プロマック顆粒-アルロイドG懸濁液（以下、P-A G液とする）の調製を考案し、その製剤的安定性および臨床効果について報告している。今回、我々はプロマック製剤の口腔内崩壊錠が製剤化されたことに伴い、プロマックD錠-アルロイドG懸濁液（以下、PD-A G液）の安定性について検討したので報告する。

【方法】0.2%懸濁液：プロマックD錠6錠をめのお製乳鉢で粉碎し、アルロイドG200mLとともに家庭用ミキサーで1分間混和した。同様に0.5%懸濁液（プロマックD錠12錠・アルロイドG200mL）を調製した。

滅菌採水瓶（ポリエチレン製）に入れ密栓し、保存条件①：25±2℃、60±5%RH、②：5±3℃において保存した。開始時および14日後、28日後に各3回サンプリングを行い、平均値にて評価した。

定量法：高速液体クロマトグラフィーにより試験を行い、内標準物質のピーク面積に対するL-カルノシンのピーク面積の比を求めた。

【結果・考察】いずれの検体も外観およびボラプレジック濃度に変化を認めなかった。これより、PD-A G液はP-A G液と同様に懸濁後の安定性が25℃において4週間維持されることが確認された。